慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日常的実践から見た巡礼に関する文化人類学的研究 : 四国遍路における接待を事例として
Sub Title	
Author	浅川, 泰宏(Asakawa, Yasuhiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2006
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.62 (2006.) ,p.264- 275
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告 : 学位授与者氏名及び論文題目 : 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000062-0264

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

茂樹君に博士（社会学）の学位を授与することが適当であると判断する。

博　士（社会学）［平成 18 年 6 月 14 日］

甲　第 2622 号　浅川　泰宏

日常的実践から見た巡礼に関する文化人類学的研究
—四国遍路における接待を事例として—

〔論文審査担当者〕

主　査　慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員
　　文学博士　　鈴木　正崇

副　査　大正大学学長・日本宗教学会会長
　　文学博士　　星野　英紀

副　査　慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員
　　教育学修士　　宮坂　敬造

内容の要旨

本研究は，これまで主として非日常的な信仰的実践もしくは宗教的儀礼として捉えられてきた巡礼を，レヴィ＝ストロース以後の構造のダイナミズムに関する理論的関心を意識しながら，日常的実践という視点で捉え直し，巡礼の多義性と変化の側面に光を当てることで，新たな文化人類学的巡礼研究の領域を開拓することを目的とする。

近年，文化人類学では日常的実践に関する議論が注目されている。日常的実践の概念は，主として P. ブルデューのハビドゥスの概念から発展的に構築されたものであり，田辺繁治はこれを汎用性，慣習性，暗黙性を含みこんだ「日常生活のすべての場面で見られるルーティン化された慣習的行為」として規定している。田辺らは，日常的実践への着目の学問的意義として，1980 年代以降のポストモダン人類学における「表象の危機」が，人類学の学問的営みである民族誌的記述がレトリックの次元に押し込められ，フィールドにおける人々の実践の視点との乖離をもたらす危険性を指摘し，これを克服する戦略的課題の側面を強調している。一方，社会学でも，A. シュッツ以降，エスノメソドロジーや現象学的社会学，構築主義等によって日常性に関する議論が盛んに行われてきた。これらは，文化人類学や民俗学において，「文化」や「民俗」をア・プリオリなものではないとする，いわゆる言語論的転回 (linguistic turn) 以降の思想的立場と響き合うものである。

こうした知見を踏まえるとき，本研究が対象化する「巡礼」概念も再考を余儀なくされる。その方向性は，当事者たちがどのようなものとして巡礼や巡礼者を認識し，解釈しているのかという，認識論的理解・解釈学的アプローチであり，それは必然的に巡礼の多義性への着目となるであろう。「巡礼 (pilgrimage)」とはある宗教的理念に基づいて設定された聖地への旅である。そのため巡礼は非日常的な信仰的実践と理解され，巡礼者論，巡礼過程論（行為論），聖地論として主に展開され，時に巡礼現象の本質論的解釈や一元的理解へと傾向づけられていた。例えば四国遍路の場合，それが弘法大師の聖蹟巡礼であり，したがって巡礼者は大師ゆかりの札所を順拝する存在であるという理解から，彼らが通過する地域社会の問題が比較的軽視されてきたことは否めない。

特にそうした言説に回収されがちなのが，「接待」と呼ばれる巡礼者歓待の慣習である。接待は，主として巡礼路沿線の人々が巡礼者に対して金品を無償施与する行為である。これが巡礼者への経済的・精神的援助の側面を持ち，巡礼者の巡礼体験に影響を与える大きな要素でもあることから，四国遍路という巡礼体系を支える構造として重視されてきたものである。そして，接待を行う動機づけとして，大師信仰や善意，愛，同情などの美的に捉えられた四国の人々の「心性」がしばしば読み込まれてきた。一方で，こうした言説は，現代社会において「癒し」「優しさ」などのキーワードと結びつけられ，「四国」に特定の立場・意味を強いるような，E. サイードの「オリエンタリズム」的問題につなげられうる言説を再生産する原動力ともなっている。だが，四国の地域社会の側からは，時に巡礼者は恐怖や忌避の対象として言及され，接待についても大師信仰の具現化として主体的・能動的に行われるもののみならず，巡礼者に巡られるという体験の蓄積によって身体化された暗黙的・日常的な実践としての側面もあることが語られもするのである。

同じ四国遍路という巡礼現象についての，このような２つの言説のズレを目の当たりにするとき，「人びとはいかに語り，思考し，行為することによって日常的実践を遂行しているのか」「それらの日常的実践はいかに意味あるものとして社会的なひろがりのなかに接合されるだろうか」「そうした社会的な接合のなかで人びとはいかに自己や集団のアイデンティティを構築し変容させながら生きていくのだろうか」という日常的実践が射程化する問題群は示唆的である。

そこで本研究では，巡礼現象の多義的理解のために，巡礼を「巡礼者という特殊な意味性を付与された他者を送り込む装置」と理解し，上記のようにまなざしの交錯する「接待」に焦点を当て，従来の多くの巡礼研究が立ってきた巡礼者側ではなく，接待者側，すなわち地域社会の側から考察することを試みる。そこで，当事者達が，日常的実践としての接待を通じて，巡礼や巡礼者達をどのようなものとして認識し，接待を実践するのかという考察を通して，彼らが認識・行為・解釈をどのように接続し，ひとつの物語を形成していくのかという問題にアプローチする。さらに，構築されるものとしての文化・民俗という考え方や，個別の実践・解釈と集合としての構造・表象の関係を「ハビドゥス」という概念モデルで説明しようとした P. ブルデュー，社会動態論としての V. ターナーのコミュニタス論などの理論的関心を念頭におきつつ，フィールドデータを歴史的パースペクティブに位置づけ，「変化」に着目しながら動態論的に把握する。

このような変化する構造や表象の問題という文化人類学の大きな課題に対して，主に日常的実践としての「接待」の分析からアプローチしつつ，巡礼の多義的理解のための新しい手法を提示することが，本研究の目的である。

各章の具体的な議論は以下のとおりである。

第１章では，巡礼研究および四国遍路研究の研究史を整理し，その成果と課題を確認した上で，本研究が文化人類学における巡礼研究の新たな可能性を開拓するものであることを提示した。まず，様々な学問領域から研究されている巡礼研究を，方法論から実証的アプローチと解釈学的アプローチに分け，本稿では後者を選択する旨を宣言する。その上で代表的な学問分野として宗教学と文化人類学を取り上げ，その系譜を整理した。

このうち宗教学については，日本宗教学会の機関誌『宗教研究』に掲載された論文及び研究発表要旨を通読し，学会のなかでどのように巡礼が議論されてきたのかを論じた。その結果，同学会において初

めて巡礼を本格的に論じたのは1950年の第9回学術大会における小池長之の学術発表「民間信仰の一形態としての巡礼」であることを確認した。そして，小池が「民間信仰(folk-beliefs)」という概念を通して，研究対象としての巡礼を発見して以降，宗教学は一貫して巡礼者の「信仰」を問題とし，その表出が観察可能な場所として「聖地」に着目してきたという宗教学的巡礼研究の特徴を指摘した。

一方，文化人類学で問題化されたのは「儀礼」である。人類学における巡礼研究は1970年代頃にV.ターナーによる巡礼＝コミュニタス(communitas)論として本格的に着手される。彼は儀礼研究からコミュニタス論を構築し，それが最も特徴的に観察可能なフィールドとして巡礼に着目し，これをA.ファン＝ヘネップの系譜を引く儀礼過程論に位置づけたという研究史的背景を持つ。ターナーの理論は，星野英紀らによって日本に持ち込まれたが，青木保，黒田悦子らの巡礼研究は彼らの儀礼研究の応用であり，巡礼研究としての発展は見られなかったことを指摘した。そこで本稿では，福島正人らによるその後の儀礼論の発展を踏まえつつ，新たな人類学的巡礼研究の課題として，民俗知識が喚起する意味と行為との関連という認識論的な問題系を確認した。

また1章後半では，本論文の事例である四国遍路に関する研究史を整理した。特にこれまでほとんど紹介されなかった戦前期の動向について詳しく言及し，それらが「ヘンド」という語彙について議論していたことを明らかにした。本稿では特にこれがフォークタームとして四国四県で使用されていたことを報告する郷土史家の記述を重視し，5章での議論に接続した。次いで戦後期の諸研究を概説し，ほとんどの研究者が，巡礼行為のみならず主として地域社会から巡礼者になされる布施行為である「接待」の慣習についても関心を寄せてきたことを明らかにした。多くの研究者が，接待を産み出す地域社会の「心性」を「大師信仰」という言葉で説明してきたが，本稿ではこれが単なる信仰(belief)の問題にとどまるのではなく，巡礼者である「遍路」を弘法大師に「見立てる」という認識の問題が含まれていることに注目し，先の人類学的研究課題に接続する。

以上の議論によって，なぜ遍路に接待を行うのかという接待の「心性」の問題を，四国遍路において巡礼者がどのように認識され，解釈され，知識化されているのかという観点から再考するという本研究の具体的課題を明らかにした。

第2章では，四国遍路の「歴史」について記述した。特に本稿が対象とする17世紀頃に確立した「民衆参加型の四国遍路システム」，すなわち巡るべき札所が固定化され，巡礼路が整備され，情報が案内本や絵図，演劇・文芸作品などを通して流通することで，一般庶民でも参加が可能になった巡礼体系の成立とその構造的変革を紹介した。

具体的には，第1節では，明治初期の神仏判然令による札所の交替と近代における鉄道・自動車の登場による巡礼手段の変化，第2節では昭和30年頃から商品化が相次いだ大型貸切バスを主力とするマス・ツーリズム化と，2000年以降の徒歩巡礼の復活という，四国遍路世界のあり様を大きく変化させたトピックを意識しながら，それぞれ，「巡礼功徳譚」としての尻なし貝伝説や，巡礼世界と日常世界の結節点としての「遍路宿」を参照点に，ミクロなモノや情報の変化とマクロな巡礼世界や地域社会の全体的状況の変化が密接に連関し，相互作用しながら四国遍路世界が変化していく様を，有機的に描き出すことを試みた。これにより，単なる歴史紹介としてではなく，マクロ/ミクロ，あるいは聖/俗が縦横に交差する，多面的構造としての四国遍路史として提示した。

第3章では，四国遍路の「空間」を議論した。これは本稿の議論の前提となる認識論的巡礼空間モデルを，歴史人類学的考察による具体的な巡礼実践の検証を踏まえて構築することを目的とするものである。

第1節では，「四国遍路」と同義語とされる「四国八十八ヵ所」を起源論的に考察し，これが近世期頃に確立した比較的新しい概念であるという説を提示した。「八十八ヵ所」は札所と遍路道を焦点化していく概念であり，「弘法大師の聖蹟巡礼としての四国遍路」という意味づけと関係づけられることで，ある種の理念型として巡礼研究の認識論的前提となっていることを指摘した。本稿では，この巡礼空間モデルを「聖地＝巡礼路モデル」と名づけ，その限界について言及した上で，巡礼研究が前提とする「空間」を，巡礼者の巡りの実践から集合的に立ち上がってくるものとして再考する必要性を指摘した。

第2節および第3節では，このような問題意識に対するひとつの試みとして実施した「広域過去帳調査」について言及した。この調査は，徳島県南西部の20数ヵ寺の寺院の過去帳を地域研究的に調査したものである。これにより，18世紀から19世紀にかけての四国遍路では，巡礼路を外れた地域にも多数の巡礼者の足跡が残されていることを証明し，先の「聖地＝巡礼路モデル」の限界を改めて実証した。

第4節では，「広域過去帳調査」で明らかになった巡礼という行動様式に矛盾する「巡礼路を外れる」という行動が，どのような行動様式によるものなのかという問題を検討した。調査地域の地誌学的考察に，仮定しうる巡礼者の行動の可能性をからめながら，最終的に巡礼者の托鉢（乞食（こつじき））行為と地域社会の接待に着目する。この托鉢＝接待が宗教的な側面に加えて経済的な側面を持つ両面的実践であることを明らかにし，ここから托鉢＝接待で提供される財物によって生存を可能ならしめる人々，いわば「遍路として生きる」人々の存在を取り上げた。そして彼らが置かれた当時の社会経済的状況の考察から，巡礼路からの逸脱は，彼らが接待を希求した結果であると捉える説を提示した。

第5節では，こうした巡礼者の両面的実践をサポートし，それによって拡大する巡礼空間や巡礼者と地域社会の接点を取り込むために，接待論の理論的な再整理を踏まえつつ，新しい認識論的巡礼空間モデルとして，札所（聖地），巡礼路（遍路道），に加えて，「理念的には巡礼世界とは無関係ながら，しかし巡礼者側からの働きかけによって，事実上，巡礼世界の一部として取り込まれていく空間領域」と本稿で規定した「乞食圏 (mendicant zone)」を導入した「第三世代型巡礼空間モデル」を提案した。このモデルで把握される地域社会こそが，本稿でいう「巡られる」社会なのである。

第4章では，巡られる社会における「権力」からの遍路認識について議論した。これは前章で議論した「乞食圏」のような，多様性・多義性を含み込む四国遍路世界に対する，権力側からの認識と統制を問うものである。従来，この種のテーマは権力がいかにして遍路達を取締・追放したかという排斥論で語られてきた。こうした視点から民俗学者・真野俊和は「近代的乞食観の成立」という言葉で，近世から近代への巡礼観の変化を端的に表現する。本稿ではこれを，M. フーコーの「まなざし」の構造の概念に引き寄せ，特に近代における遍路者への認識の構築過程，背景知識，分類基準，そして権力行使の問題等を，近代の「県」，近世の「藩」における四国遍路政策の比較研究を通して再検討し，最終的に近代的遍路認識の特徴を，ある合理的な基準に則って「遍路」を明確に類型化する〈分類のまなざし〉として理解する。

まず第1節では，近世土佐藩の法令集である『憲章簿』の四国遍路関連文書を通時的に分析し，当時の四国遍路政策の諸特徴に関する新たな解釈を提示した。土佐藩の四国遍路政策はこれまで，厳しい取

締令として理解されてきたが，本稿では脇道厳禁や日数制限，庄屋による日次ぎ改めといった巡礼者の空間と時間を制御し，彼らのトレーサビリティを確保するために設けられた諸制度の中に，「遍路は順路にそって速やかに領内を通過させる」という基本原則を発見し，さらに様々な規制令・禁止令には，「志願」「大願」「信心」等の信仰表明を元に例外事項を設けられていることから，近世土佐藩が，「遍路とは信仰に基づいて四国霊場を巡礼する宗教的実践者である」という認識を持っており，こうした信仰的実践を正統化し，尊重する態度を持っていたことを指摘した。

この分析を踏まえて第2節では，1870年代に集中して出された遍路取締や接待＝托鉢禁止を各県の県令布達等から考察し，取締の対象となる「遍路」をどのように認識するかという点について近世・近代の比較を行った。

そこから本稿で見出したのは，近世には「遍路体の者」というタームを特徴とする，隣接概念が不明瞭で曖昧さを含み込んだambiguousな多義的境界性で捉えられた存在が，近代においては，「乞食遍路」というタームを特徴とする，隣接概念として明確に「乞食」が意識されたambivalentな両義的境界性を持つ存在として捉えられるという認識の変化である。さらに後者の論理は，境界的存在を例えば資金の有無という明確な基準で，「乞食」と「遍路」に合理的に類型化していく〈分類のまなざし〉へと発展する。この対比を端的に示すのが，天保8年に出された土佐藩の「入口番人共取扱心得」(1837)と，明治11年に高知県警で通達された「乞食遍路取扱心得」(1878)である。前者は納経と資金の有無を調べ，納経を持たないものを「乞食に紛敷」と曖昧さを残したまま追放するのに対し，後者は資金を持たないものを，「乞食者と見做し」と明確に断定した上で追放するのである。

〈分類のまなざし〉は，近世的な治安問題や経済問題に加え，富国強兵・殖産興業の下支えとなる戸籍制度の制定や，文明開化・条約改正の文脈につながる風俗改良運動，そして公衆衛生といった近代のプロジェクトによって与えられた，複雑で多彩な排除の論理と結合し，「遍路」を様々な角度から排除に向かわしめるように，構造的に構築されたまなざしであり，県・警察・新聞などそれぞれに専門化された権力のネットワークが組織的に「遍路」を排除していくシステムを駆動させ，「遍路狩り」などを実施していく原動力になった。これを本稿では四国遍路における「近代的排除システム」として理解する。すなわち，近代の各県において望まれた遍路者像とは，戸籍を有し，生業を持ち（巡礼を生活手段とせず），十分な資金を有し，托鉢をせず，身なりを調え，清潔かつ健康である，そのような遍路者なのである。

最後にこのような近代的な巡礼観・乞食観が巡礼者の側にも共有されたことを，巡礼者側から提案された新しい遍路像に関する議論から確認した。それは，近代的排除システムが組み込まれた四国遍路世界という現状を認識し，そこからの巡礼者の保護という戦略に基づき，そのシステムを駆動させる〈分類のまなざし〉を，巡礼世界に戦術的に導入するものであった。彼らは，〈分類のまなざし〉を宗教上・信仰上の論理との整合性を確保し，その上で，托鉢等と決別し，自らを「神聖な」遍路として正統性を宣言する。それは同時に乞食遍路等を巡礼世界の内側から異質化させていく，一種の真偽論であったのである。

このように近代の四国遍路は，広く共有された〈分類のまなざし〉に特徴づけられる。すなわち四国遍路世界は，「遍路」を正統性にひきつけた「本物の」あるいは「無害な」存在と，異質性に追いやられた「偽物の」あるいは「有害な」存在に理念的に切り分けられ，前者のみが「遍路」として存在することを許されたのである。

第5章では，巡られる社会における「民俗」からの遍路認識について議論した。まず前章でみた近代的排除システムが，巡礼者や地域社会に意識されつつも，当事者のレベルで限界づけられていたことを，1918年に四国遍路を巡礼した女性史家・高群逸枝の体験記から確認した。確かに巡られる人々も，〈分類のまなざし〉に近い認識構造を持ち，フォークタームを用いて遍路を「語り分け」る。だが，時にその語り分けは反転・統合し，結果的に遍路の両義性を表象するような語りがなされていく傾向があるのである。ここでは，このような複雑なまなざしの力学を持つ遍路認識の構造を，フォークタームのレベルから解きほぐし，彼らの解釈の揺らぎのメカニズムを説き明かすことを目的とした。

特に本稿で注目したのは，こうした認識と解釈のゆらぎが顕著に表出する「ヘンド」である。彼らは，信仰の希薄さ，不衛生さ，強欲さ等によって特徴づけられ，ネガティブな意味性を付与される来訪者である。このヘンドは，「本物」の巡礼者である「オヘンロサン」に対比する形で，彼らの語りの中に登場し，乞食概念にひきつけられながらも，時に巡礼者概念に引き戻されるという，不確定な認識・解釈に晒される両義的境界性を持つ異人的特徴を持つ。だがこれまでの四国遍路研究は，ヘンドを遍路や乞食といった一般概念に回収し，その特殊な両義性や境界性，ひいては彼らの「語り分け」という遍路認識そのものについて注意を払ってこなかった。

これに対し本稿では，異人論の現在的課題を確認しつつ，まず第2節で遍路認識に関するフォークタームを，昭和30年代頃を中心とする日常的実践としての接待に関する民俗誌的記述を通じてフィールドから掘り起こし，第3節で遍路を語り分けたテクストの記号論的分析や，各自の「語り分け」について議論した座談会の記録の合意形成論的分析の結果とすり合わせながら，これを分析概念化する。その上で，「〈ヘンド〉概念のトポロジー」と，「接待における認識のフローチャート」という2つの解釈モデルを提示した。

これらの議論を踏まえながら，4節では，彼らは〈ヘンド〉概念や語り分けの技法をどのように駆使して，「遍路」を認識するのかという民俗知識に関する具体的な分析を，1980年代から1990年代という比較的近年の事例について行った。最後に，この分析を踏まえ，聖性と日常性に関連し，対象者を境界性・異質性へと解釈していく認識の方向性である「分割のまなざし」と，聖性のみに関連し，対象者を正統性へと解釈していく認識の方向性である「統合のまなざし」の，複雑で非対称な力学によって，遍路者に対する解釈が，不確定かつ連続的に産み出されることを説明するモデルを提示した。

第6章では，「巡礼者」による語りを取り上げた。本研究では巡礼現象の日常性からの再考をテーマに掲げ，四国遍路における日常的実践としての接待を主として議論してきた。前章では巡られる人々の遍路認識に関する民俗知識の構造を明らかにし，その解釈モデルを提示した。こうした視点の取り方は，多分に戦略的なものであり，これまで巡礼者側に偏重していた巡礼理解に対し，民俗知識の側からのオルタナティブな発見に可能性を開く試みである。

第6章では，前章までの到達点を踏まえつつ，巡る側の語りを追加することで，より多面的な四国遍路世界を描き出すと同時に，本研究の視座が巡礼者側に立つ巡礼研究にどのように応用できるのかという発展的課題に踏み込むために，日常的実践としての接待によって身体化された民俗知識の現代的展開を議論した。

まず，巡礼者・巡礼行研究の最新動向の整理から，この分野で活発な議論が行われているテーマとして，巡礼の動機論・目的論を取り上げる。従来，このテーマに関しては主として社会学的アンケート調

査による手法が用いられ，「信仰/観光」等の類型化を切り口に，年齢・性別などの巡礼者の属性とからめて議論されてきた。しかしながら，近年では巡礼の動機・目的は多様化し，その中から「癒し」や「自分探し」といった「新しい」とされる動機が「若者」や「徒歩」巡礼と結びついて浮かび上がっていることを確認する。

だが一方で，巡礼のフィールドでは，病気や死といった「伝統的」な動機・目的を隠し持っている巡礼者に出会うこともまれではない。本章で取り上げたのも，こうした「苦しみ」から出発した巡礼者である。彼女はかつて巡られる立場にいたのだが，ある出来事を契機に歩き遍路を思い立つ。このとき，彼女がどのようにして，この巡礼を想起し，実践し，解釈していくのかというプロセスを，解釈学的手法に加え，宗教学者の池上良正の「共苦共感」概念を読み込みながら分析した。

最後に，彼女が実際の巡礼体験による一連の心的変容から，四国遍路に関する民俗知識を再構成し，それに基づく全く新しい形の接待を日常的に実践していることを紹介し，本研究が一貫してとってきた巡られる立場からの巡礼研究と，今後の課題としての巡礼体験に関する研究に架橋的なパースペクティブを構築し，本研究の発展的可能性の提示を行った。

論文審査の要旨

本論文は，宗教的理念に基づいて設定された聖地への旅である巡礼 (pilgrimage) を，文化人類学の立場から考察し，地域社会の日常的実践の視点から，その多義性と変化を明らかにした独創的な業績である。巡礼は，従来は非日常的な信仰実践や宗教儀礼として捉えられ，その解釈は本質主義的で一元的理解になる傾向が強かった。本論文は，長年にわたる四国遍路のフィールドワークと新たな文献の収集を踏まえて，先行研究を批判的に検討した上で，認識論の立場から新たな解釈を施している。内容は以下のとおりである。

序　章　研究の目的と方法
　第１節　研究の目的—actual な問題としての日常性と巡礼現象の多義的理解の結合に向けて
　第２節　研究の方法—「巡られる」視点からの巡礼再考
　第３節　研究の対象—四国遍路の概要について
　第４節　本書の構成
第１章　巡礼研究の展開と課題—四国遍路研究に引きつけながら
　第１節　巡礼研究の展開と文化人類学的課題
　第２節　四国遍路研究の展開と課題
第２章　四国遍路の構造変化—17 世紀後半から 21 世紀初頭まで
　第１節　凝縮する聖性—巡礼功徳譚のダイナミズムと「八十八ヵ所」
　第２節　遍路宿の民俗史・誌—マス・ツーリズムの拡大から歩き遍路の復活まで
第３章　巡礼空間の認識論的再考—四国遍路の歴史人類学的考察から
　第１節　巡礼空間モデルの認識論的再考にむけて
　第２節　広域過去帳調査—企画と方法について
　第３節　遍路道を外れた遍路達—調査結果
　第４節　四国遍路の歴史人類学的考察と「乞食圏」

第５節　接待論の再考と第三世代型巡礼空間モデル
第６節　附録―過去帳調査に関する二つの覚書
第４章　まなざしの構築学―正統性・境界性・異質性
第１節　『憲章簿』にみる土佐藩の遍路認識―堅持された正統性と ambiguous な境界性
第２節　遍路者認識のモダニティ―ambivalent な境界性と排除に向かう〈分類のまなざし〉
第５章　四国遍路のターミノロジー―接待の実践と「ヘンド」の解釈学
第１節　巡られる人々の遍路者認識に迫るために
第２節　日常的実践としての接待に関する民俗誌―昭和 30 年代頃までの阿南市を中心に
第３節　語り分けられる遍路達―フォークタームの分析概念化と解釈モデルの構築
第４節　接待の実践論―解釈の不確定性をめぐって
第６章　巡礼における救済の語り―苦しみの脱危機化から日常的実践へ
第１節　多様化する巡礼の動機と苦しみの巡礼者
第２節　ある病気治し遍路の事例から

序章「研究の目的と方法」では，本研究の焦点となる日常的実践の概念を検討し，巡礼研究への適応を論じる。日常的実践とは，「日常生活のすべての場面で見られるルーティン化された慣習的行為」（田辺繁治）であり，汎用性，慣習性，暗黙性を含み込んだ実践である。この概念は，文化人類学で生じた 1980 年代以降の「表象の危機」を反省的に克服するために，P. ブルデューのハビドゥス概念などから発展的に構築され，人々の実践の視点を深く取り込む意図があった。この観点から，地域社会に生きる人々，つまり当事者たちが巡礼や巡礼者を認識し，解釈しているかという認識論的理解によって，巡礼の多義性を描き出す。

特に注目したのは，四国遍路に特徴的な「接待」と呼ばれる巡礼者歓待の慣習である。接待は，巡礼路沿いの人々が巡礼者に対して金品を無償施与する行為で，巡礼者への経済的・精神的援助であり，巡礼者の体験に大きな影響を与える。接待の動機づけには，巡礼者が同行二人として弘法大師とともに歩いているという大師信仰の具現化にとどまらず，善意，愛，同情など美的に捉えられた四国の人々の「心性」が顕在化する行為とされてきた。こうした言説は，現代社会では「癒し」「優しさ」などと結びつけられ，四国に特定の立場や意味を強いる言説を再生産する原動力となっている。他方，四国では巡礼者は恐怖や忌避の対象として言及され，地域社会では「巡られる」体験の蓄積によって身体化された暗黙知や日常的実践として働いているという。

本論文の課題は，歓待され忌避されるという二つの言説と行為のズレを，「人びとはいかに語り，思考し，行為することで日常的実践を遂行しているのか」という観点から見直して，巡礼現象の多義的理解に迫るのである。そこで，巡礼を「巡礼者という特殊な意味性を付与された他者を送り込む装置」と理解し，まなざしの交錯する「接待」に焦点を当て，地域社会から，巡礼に関する認識・行為・解釈の接続と，物語形成を考察する。文化人類学の課題としては，構造や表象の変化への関心であり，「接待」を日常的実践として見直して，巡礼理解に止まらずに，一般理論に寄与することが本研究の目的であるという。

第１章「巡礼研究の展開と課題」では，巡礼に関する宗教学と文化人類学の先行研究と，四国遍路に関する研究史を整理し，成果と課題を確認した上で，巡礼研究の新たな方向性を開拓すると主張する。

宗教学については，主として『宗教研究』の成果を検討し，小池長之が1950年に「民間信仰」(folk-beliefs)という概念で，研究対象としての巡礼を発見して以降，一貫して巡礼者の「信仰」(belief)を問題とし，その表出が観察可能な場所として「聖地」に着目してきたという特徴を指摘した。一方，文化人類学では，V.ターナーが『儀礼の過程』(1969)で提示したコミュニタス(communitas)概念が巡礼に適用された。コミュニタスとは，通常の社会関係を融解させて一時的に平等性を現出する非日常的状況であり，巡礼もその展開と考える。その特徴は，A.ファン＝ヘネップの系譜を引く儀礼過程論である。「儀礼」を焦点としたターナーの巡礼研究は，星野英紀や青木保などによって1970年代に日本に導入されたが，その後の展開には余り新味がないという。本論文は，「信仰」と「儀礼」の相互を意識しつつ，福島真人などによる儀礼論の発展を踏まえ，日常的実践の中で民俗知識が喚起する意味と行為との関連に注目して，認識論の構築へと向う。

四国遍路研究史に関しては，未紹介であった戦前期の動向に言及し，「ヘンド」という民俗語彙を議論していたことを明らかにした。また戦後期の諸研究からは，主要な研究者が，巡礼だけでなく「接待」の慣習にも関心を寄せ，「接待」を生み出す地域社会の「心性」を大師信仰で説明してきたという。本論文では単なる「信仰」の問題にとどまらないと考え，地域社会の人々が巡礼者を弘法大師に「見立てる」という考えがあることを根本に据えて，接待の心性を，巡礼者の認識—解釈—知識化の観点から再考することを課題としたという。

第2章「四国遍路の構造変化」では，四国遍路の歴史について簡略に記述する。遍路を把握する主要な考え方は，17世紀頃に確立した「民衆参加型の四国遍路システム」，すなわち巡るべき札所の固定化により，巡礼路が整備され，情報が案内本や絵図，演劇・文芸作品などを通して流通することで，庶民の参加を可能にした巡礼体系の成立にあると考え，その構造的変革の過程を考察している。近代の大きな変化は，第一は明治初期の神仏判然令による札所の交替，第二は鉄道・自動車の登場による巡礼手段の変化，第三は1955年頃から顕著になったマス・ツーリズム化，第四は2000年以降の「徒歩巡礼」の復活である。遍路の変化を考慮しながら，「巡礼功徳譚」としての尻なし貝伝説や，巡礼世界と日常世界の結節点としての「遍路宿」の動きを織り交ぜて描き出す。ミクロなモノや情報の変化と，巡礼や地域社会の全体的状況の変化との密接な連関と相互作用の中で四国遍路の変化の様相を描き出すことを試みている。ここでは単なる歴史の紹介ではなく，マクロ/ミクロ，あるいは聖/俗が縦横に交差する，多面的構造としての四国遍路史を提示する。

第3章「巡礼空間の認識論的再考」では，歴史人類学的考察による具体的な巡礼実践の検証を踏まえての巡礼空間モデルの構築を目的としている。最初に，「四国遍路」と同義的に捉えられる「四国八十八ヵ所」を起源論的に考察し，これが近世期頃に確立した比較的新しい概念であるという説を提示した。「八十八ヵ所」は札所と遍路道を焦点化する概念で，「弘法大師の聖蹟巡礼としての四国遍路」として意味づけられ，理念型として巡礼研究の認識論的前提となっている。これを，「聖地＝巡礼路モデル」と名づけて，その限界を指摘し，空間を巡礼者の実践から集合的に生成されるものとして再考する必要性を指摘している。その試みとして，徳島県南東部の寺院過去帳の調査に基づいて，18世紀から19世紀の四国遍路では，巡礼路を外れた地域にも多数の巡礼者の足跡が残されていたことを明らかにした。さらに，巡礼者の「巡礼路を外れる」という行動が，いかなる動機によるものかを検討し，最終的には巡礼者の托鉢と地域社会の接待に着目して，接待で提供される財物によって生存を可能とする，いわば「遍路として生きる」人々の存在を取り上げた。

以上の事例研究に基づき，札所（聖地），巡礼路（遍路道）に加えて，「理念的には巡礼世界とは無関係ながら，巡礼者側からの働きかけで，巡礼世界の一部として取り込まれていく空間領域」を，〈乞食圏〉(mendicant zone) の概念で把握し，多様性・多義性を含み込む新しい巡礼空間モデルの構築を提案している。これは巡礼者の実践で拡大する巡礼空間であり，巡礼者と地域社会の接点を拡張する試みで，こうした地域社会の主体的な対応を，「巡られる」側の日常的実践の論理として提示している。

第4章「まなざしの構築学」では，〈乞食圏〉のような遍路世界に対する，権力側からの認識と統制を問う。従来，このテーマは遍路排斥論として語られ，真野俊和の表現を借りれば，「近代的乞食観の成立」であり，近世から近代への巡礼観の変化を端的に表現している。本論文ではこれを，M. フーコーの「まなざし」の構造の概念に引き寄せて，遍路者認識の構築過程，背景的知識，分類の基準，権力行使の問題等を，近世の「藩」，近代の「県」での遍路政策の比較を通して再検討し，最終的に近代的な遍路認識の特徴を，合理的な基準に則って「遍路」を明確に類型化する〈分類のまなざし〉として理解する。

具体的には，近世土佐藩の法令集『憲章簿』の遍路関連文書を通時的に分析した。その結果，土佐藩の遍路政策は従来は厳しい取締令として理解されてきたが，実際には脇道厳禁や日数制限，庄屋による日次ぎ改めといった諸制度の中に，「遍路は順路にそって速やかに領内を通過させる」という基本原則があることを発見した。さらに，「大願」「信心」等の信仰表明に関する規制令・禁止令の例外事項の検討から，近世土佐藩には，「遍路とは信仰に基づいて四国霊場を巡礼する宗教的実践者である」という認識があり，信仰的実践を正統化し，尊重する態度を持っていたと指摘して，当時の遍路政策の諸特徴に関する新しい解釈を提示している。また，1870年代に出された各県の県令布達等から，取締対象としての「遍路」の認識についての比較を行った。その結果，「遍路」は常に境界性を帯びているが，近世には「遍路体の者」という表現で曖昧さを含み込んだ ambiguous（多義的）な存在であったが，近代では「乞食遍路」，つまり「乞食」を意識した ambivalent（両義的）な存在として把握されるというように認識が変化したという。後者の論理は，資金の有無という明確な基準で，遍路を「乞食」と「遍路」に合理的に類型化する〈分類のまなざし〉へと発展し，遍路取締や接待・托鉢禁止が起こる。その背景には，近世では治安問題や経済問題，近代では富国強兵・殖産興業や風俗改良運動，公衆衛生の導入等の運動があり，複雑な排除の論理と結合して，県・警察・新聞など専門化された権力のネットワークが組織的に「遍路」を排除するシステムを駆動させて，「遍路狩り」を実施していく原動力になった。これを本論文では「近代的排除システム」として理解し，近代的な巡礼観・乞食観が巡礼者の側にも共有されたことを，当時の遍路像を模索する記録でも確認する。

第5章「四国遍路のターミノロジー」では，「巡られる社会」における「民俗」からの遍路認識について検討している。いわゆる「近代的排除システム」が，巡礼者や地域社会に意識されつつも，当事者レベルでは柔軟に解釈されていたことを，遍路体験記の分析から確認する。「巡られる人々」も，〈分類のまなざし〉に近い認識構造を持ち，民俗語彙を用いて遍路を「語り分け」る。しかし，時にその「語り分け」は反転・統合し，結果的に遍路の両義性を表象する語りがなされていく。特に本論文では，認識と解釈の揺らぎが顕著に表出するヘンドの概念に注目する。ヘンドは，信仰の希薄さ，不衛生さ，強欲さ等によって特徴づけられ，ネガティブな意味性を付与される来訪者である。ヘンドは，「本物」の巡礼者であるオヘンロサンに対比されて，語りの中に登場し，「乞食」概念に引き寄せられながらも，時に「巡礼者」概念に引き戻されるという，不確定な認識・解釈に晒される。いわば，両義性や境界性を持つ異人である。これまでの遍路研究は，ヘンドを遍路や乞食といった一般概念に回収し，その特殊な揺れ

動きや，地域社会の「語り分け」には注意を払ってこなかったという。本論文では，遍路の「語り分け」の記号論的分析を行い，当事者の「語り分け」についての座談会記録なども資料に取り込んで分析し，オヘンロサンとヘンドを巡る認識の方向性を，聖性と日常性の両極の間にあって，聖性を指向して対象者を正統性へと解釈していく「統合のまなざし」と，対象者を境界性・異質性へと解釈していく「分割のまなざし」という複雑で非対称な力学によって，巡礼者に対する解釈が不確定かつ連続的に生成されることを説明する。複雑なまなざしの力学を持つ遍路認識の構造を，民俗語彙から解きほぐし，解釈の揺らぎのメカニズムを説き明かしている。

第6章「巡礼における救済の語り」では，前章までの議論を踏まえ，「巡る側」の語りを追加して，多面的な遍路の世界を描き出すと同時に，日常的実践から見た「巡られる側」からの視座を，「巡る側」とどのように接合するかを考える。研究の焦点は，巡礼者の動機や目的にある。従来，このテーマに関してはアンケート調査が用いられ，「信仰/観光」等の類型化を切り口に，年齢・性別等の巡礼者の属性とからめて社会学の側から議論されてきた。しかし，近年では巡礼の動機・目的が多様化し，「癒し」や「自分探し」といった「新しい」動機が，若者の増加や「徒歩巡礼」のブームと結合して浮上している。一方で，巡礼者には，病気や死に関わる「伝統的」な動機・目的を持つ者も多い。本章では，こうした「苦しみ」から出発したある巡礼者を取り上げ，巡礼を想起し，実践し，解釈していく当事者の過程を再解釈し，池上良正の「共苦共感」概念を使いながら分析する。そこでは，日常的実践としての接待によって身体化された民俗知識が顕在化する。巡礼者は自己の体験による一連の心身変容によって，四国遍路に関する民俗知識を再構成し，全く新しい形の接待を日常的に実践しているという。このように，「巡られる」立場を，「巡る」側からの巡礼体験へと架橋する視座を構築して，本研究の発展的可能性の提示を行っている。

本研究は，いくつかの点で従来の巡礼研究を乗り越える独創性を持っている。第一は，巡礼者論，巡礼過程論，巡礼行為論，聖地論などに展開してきた巡礼研究に対し，徹底して「巡られる側」の論理と認識を対峙させ，巡礼者との接点である「接待」に焦点を絞り，日常的実践の観点から巡礼者を迎え入れる論理を一貫して追求したことである。第二は，点と線，つまり寺院（札所）と巡礼路にこだわってきた四国遍路の研究に対して，巡礼路の周辺まで研究対象を拡大し，過去帳を分析して巡礼路を外れた遍路の存在を明らかにし，〈乞食圏〉と命名するなど，面を考慮した巡礼研究の試みに展開したことである。第三は，四国遍路研究に際して誰もが使用する行政文書を利用しながらも，詳細な読み直しと，文脈を変えて読む試みを通じて，遍路という移動性を持つ者に関与する排除の論理を近代の権力の「まなざし」に関連づけて新たな解釈の可能性を導き出したことである。第四は，ヘンドという民俗語彙に含まれる多義性や多元性を歴史人類学の視野を含み込んで掘り起こし，「巡られる側」からの揺れ動く視点を「語り分け」の論理として提示し，「遍路」という民俗知識に関する分析という認識論的アプローチで理解を深めたことが挙げられる。第五は，四国遍路研究は1000キロを超える遍路道，寺院，巡礼者など拡散し多面性を持つ現象を詳細に追いかけての調査であり，現実にはたいへんな労力を伴い，それを成し遂げてなお新たな事実と伝承を掘り起こしたフィールドワーク自体を評価することができる。第六は，学説の新たな応用という点で，構築される文化や民俗という考え方，P. ブルデューのハビドゥス概念に触発された日常的実践の議論を中核に据えて説明する試み，V. ターナーのコミュニタス論などの理論を現地の当事者の概念で捉え直して歴史的視野で社会動態論に組み込むなど，一般理論の構築に展開しようとする試みを評価したい。

ただし，いくつかの問題点や今後の課題も残されている。それは，第一には，地域研究に基づく地を這うような丹念な調査による成果で，細部にこだわることは人類学の基本であるが，やや断片的に提示されるために，「四国遍路とは何か」という総合的な視野が希薄になり全体像が掴みにくくなる傾向が生じている。〈乞食圏〉の発想自体は面白いし，点・線に面を加えたことで浮かび上がる地域性 locality への関心も悪くはないが，四国遍路を歩いて巡る人間の行為とは一体何だろうかという大きな問いにも答えうる体系化への展開が望まれる。第二は，地域の人々の語りについてであるが，個別の事例に過剰な解釈が施される場合があり，数少ない事例が大きな結論に結びつけられる危険性がある。ミクロとマクロの接合は人類学的手法の課題とも言える。また，〈乞食圏〉の事例は阿南市の事例に限られており，同様の事例を数多く集めて説得力が増した時点で，普遍化・体系化を試みて，四国遍路の全体性を視野に入れた議論をする方が望ましいと言える。第三には，取り上げている資料や主題から言えば，フランスのアナール学派による社会史の手法である「心性史」が有効性を発揮する部分もあると見られる。特に，接待の経済的側面に注目すれば，江戸時代中期以降の商業の発展を踏まえての変化や，貨幣経済と互酬性の関係の変化，近代以降の宗教性の希薄化を検討して，心性の歴史的変化を強調すべきであったかもしれない。第四は，ヘンドの議論についてで，異人が文脈に応じて異なる認識が付与されることを明らかにした功績はあるが，中心と周縁の動態に基づく異人歓待論をどのように乗り越えたかを明確化することや，オヘンロサンとヘンドには収斂と拡散，尊称と蔑称という非対称性があることを考慮するなどの課題がある。第五は，信仰については組み込みを薄めているが，弘法大師につながる霊威的次元は依然として重要であり，これと地域社会の生活者の次元が交錯することで，仏教と民俗を巡る観念・実践・モノの二重性が生じた動態的状況として描き出す必要があるのではないだろうか。第六は，学説史については，実践に関してはP. ブルデューによる主観と客観の超克，儀礼から実践への移行についてはブロックの権力と知識に関わる考察，会話や言語についてはS. J. タンバイアの儀礼の行為遂行性を検討すれば，日常的実践の議論を展開する意図がより明確になったと思われる。V. ターナーのコミュニタス論を社会過程として読み直して巡礼に適用することも必要であろう。第七として，今後の課題を提示すれば，通時的には，史料の限界はあるが，フランスの社会史の成果に学んで，旧藩の政治的統合が巡礼地に及ぼす影響を，「歴史人類学」として描き出すこと，共時的には，接待者―巡礼者の象徴的相互作用の過程を文化人類学的観点から構造的に掘り下げて論じ，全体性を考慮したモデル化の構築を行うべきだと考える。これによって四国遍路以外の巡礼や，世界各地の巡礼との比較が可能になるであろう。

本論文は，以上のように課題と問題点を残すものの，四国遍路に関する従来の研究蓄積を踏まえた上で，歴史史料や地方文書を掘り起こし，フィールドワークに基づく独自の解釈を加えており，文化人類学や民俗学の立場から巡礼研究に関して新たな視点を導入した業績として，博士（社会学）の学位の授与に値するものと判断する。